

令和2年7月豪雨災害調査レポート

7月21日・26日、この度の「令和2年7月豪雨」の支援活動を九重町で行って来ました。

ボランティアセンターは、資機材の準備やボランティアの受付など“初めての運営”に戸惑っていると同っていましたが、26日、ようやく人手を要するニーズも落ち着いてきて、募集が減少しつつあります。



懸念されてきた“新型コロナウイルス感染症の下での災害”では、県外ボランティアは頼れません。そのような状況の中、県内の被災地で見えたのは、“地域の中での助け合い”でした。日田市のように、深刻な被害に遭った地域は折に触れ、メディアが報道する事で様々な支援の手が届きます。しかし、そうでない地域は地元住民同士で補完し合わなければ復旧が進みません。そういった姿から、これからの災害を乗り切るためには“地域の中で完結する力”がポイントと言えます。



更に、今回の支援で目立ったのは、“学生のボランティア参加”でした。ボランティアを切望していた地域は、どんなに有難かったことでしょう。若い力は被災地のエネルギーにもなります。しかし、これは学生の保護者会、大学管理者、教員など幅広い方々の理解が無ければ実現できません。

懸念される南海トラフ大地震を想定したとき、大分にはボランティアの手が届かないと危惧しておりました。この“コロナ禍の災害”が契機になって、“学生ボランティア”の潮流が出来る事を切に祈念します。